

# 「七夕」雑考

西野春雄

天文学者の野尻抱影氏に「天鼓と星」というエッセイがある(『能』昭和23年7月号)。

謡曲にも造詣の深い野尻氏の好エッセイであるが、「天鼓」が牽牛星に関係があると直感された氏は、鼓と名のつく星に牽牛星の一名で「河鼓」なる星を探し(天の川のほとりにあるのでこの名があるという)、天鼓は河鼓の三星のことと推測される。後日、晋書の天文志に「河鼓三星、牽牛の北に在り、天鼓也。軍鼓を主る。」とあるのを発見する。

まさに氏の推測どおり天鼓は河鼓三星の別称であったのである。さらに氏は(謡曲「天鼓」が七夕の伝説に関係があり、事件も二星相会の夜のことになってゐる。しかし、この作初め、謡曲の全般を見渡しても、牽牛織女を直接に扱った作のないのは、どうしたものだろう)と訝かたておられる。

たしかに現行約二四〇番のなかでは、七夕星祭りの夜を舞台とする「関寺小町」や「東方朔」にしろ、遊子伯陽が月に誓って契りとなし七夕の二星となつた故事に触れる「鶉

飼」にしろ、あるいは「呉服」「碇」「唐船」「楊貴妃」などにしても、七夕に事寄せた字句が散見する程度に過ぎない。しかし廢曲に目を向けると、たとえば遊子伯陽の故事を一曲の眼目たるクセに据える「朝顔」があり、さらに牽牛織女(遊子伯陽)を主人公にした「七夕」もある。「朝顔」は朝顔の花の精をシテとする夢幻能だが、朝顔を牽牛花と呼ぶことからクセに七夕説話を持ち出した作品であり直接の素材とはいえないが、「七夕」はそのクセで語られる遊子伯陽説話に取材した曲である。廢曲とはいっても江戸初期まで演じられており、典拠・構成・文辞などの点で興味深い問題を有している。七夕にはやや早いがこの曲について少し考えてみたい。

「七夕」は女神の能である。登場人物は前シテ女、ツレ男、後シテ織女、ワキ漢の武帝の臣張騫。天上の有様を見て参れ<sup>まほし</sup>との勅を受けた張騫が天の河に至り、牽牛・織女<sup>たねな</sup>の二人に逢い、二星の謂われを聞く物語であるが、この話は『今昔物語』巻第十

の「漢武帝」以張騫令見天河水上語」にある(原話は前漢書)。さらに『俊頼髓腦』や「和歌色葉」などの中世の歌学書にも見えるが、『今昔』『俊頼髓腦』では牽牛を翁とし、『和歌色葉』では童とする。翁も童(永遠の少年)も神性的だが、ツレを男とする本曲は後者に近い。ところが遊子伯陽説話はこれらには見えない。

従来この説話は『曾我物語』や『鶉鷺合戦物語』に見えるものの典拠不明とされてきたが、片桐洋一氏によって『古今和歌集序聞書三流抄』(略称・三流抄)にあることが指摘され(同氏『中世古今集注釈書解題二』昭和48年4月、赤尾照文堂刊)、伊藤正義氏が「謡曲の和歌的基盤」の中で「朝顔」を例に論及されていられる(『観世』昭和48年8月号)。『毘沙門堂本古今集注』にも見え「古今注」の世界と謡曲との関連がまた一つ確かめられたわけである。従つて本曲の素材としては、

(一)武帝の臣張騫が天の河に至り、牽牛・織女に逢つた話(今昔物語・和歌色葉など)

(二)遊子・伯陽が七夕の二星(牽牛・織女

となつた話（三流抄など古今集序の俗解）の二つを指摘することができよう。

本曲の詞章は元祿二年刊林和泉掾本を翻印した『謡曲全集』（国民文庫本）や『謡曲叢書』などの活写本でも読めるが、ワキの「ちやうけん」を「しやうけい」、「人間のたぐい」を「たい」と誤る例を始め所々文句が異なるし、小段構成の上でも二三の違いがあるので写本に拠るのがよいと思う。ただし写本間にも若干の相違はある。次に室町末期の観世流謡本に基づきながらこの能の概略を進行に即しつつ見てゆこう。

①ワキ張齋の登場。宣旨に任せて天の川に至る。神能であるから真ノ次第で登場するのだろう。（次第・名ノリ・サシ・上ゲ哥・着キゼリフ）

②シテ女（織女）・ツレ男（牽牛）の登場。女は糸を織り、男は牛を曳く。新能ゆえ真ノ一声で出るか。ただし「セイには二の句がない。（「セイ・サシ・上ゲ哥）」

③両者の応待。シテ・ツレは七夕・彦星と名乗り、今日が二星相い逢う日であることを告げる。銀河の叙景。（問答・掛ケ合・上ゲ哥  
|| 初回）

④シテの物語。二星の起り、遊子伯陽のことを物語る。（誘イゼリフ・クリ・サシ・下ゲ

哥・上ゲ哥）下ゲ哥以下をクセにする謡本もあるが本来クセではなかつたと思う。版本はクセ。

⑤シテ・ツレの中入。夕月の出に時刻の到来を知る。来序中入。（掛ケ合・上ゲ哥）

⑥間狂言（明星）、来序で登場。（名ノリ・シヤベリ・三段ノ舞・ノリ地）

⑦後ジテの登場。出端で出る。（「セイ・サシ・ノリ地」）

⑧シテの舞事。（ノリ地・破ノ舞）謡本や江戸初期の笛伝書に破ノ舞とある。ここは現在の太鼓中ノ舞に相当するらしい。

⑨結末。二星を渡す鳥鵲の橋。（ロンギ）返し句を省くなどしてノリ地にする謡本もある。

右の構成を概観すると、ほぼ神能の定型に近いことが了解できるが、④のシテの物語の段はクセとせず、下ゲ哥・上ゲ哥にした点がやや異色だ。同じ本説に依拠しながら、「朝顔」のクセの文体が『三流抄』そのままいつてよく、教科書どおりの作詞であるのに対し、本曲のクリ以下上ゲ哥までの文章は、所要所を引用するに留め、他は自由に脚色しつつ一曲の頂点を作り上げている。

全体にかつちりした構成とはいえず、シテ・ツレがすぐに本性を明かすあたりに古作の匂いも感じられる。シテを織姫とする共通性からか文体上も「呉服」に酷似し、特に⑨

の後ジテの登場歌サシ「錦を織る機物のうち  
に相思の字を頭はし、衣打つ砧の上に、怨別  
の声（もや添ふ）」は「呉服」と同文である。  
また②の登場歌サシ「面白や人間の水は南  
に流れ、天上の星北に拱る。」は「天鼓」  
や「千引」で耳近いが、この二曲は「北に  
拱たんだく」と読む。『運歩色葉集』などの辞  
書には「タンダク」とあるが、「拱」は（メグ  
ル）ないし（ムカフ）が正しい読み方の方  
である。

次に続く上ゲ哥「水かげ草の穂なみまで、  
／＼、靡くを見れば時来ぬと、紅葉を帯びて  
秋の波、うち橋渡し行く水の、逢瀬の川の秋  
や知る、／＼」は小謡集にも採られており、  
この一節は広く謡われたものらしい。

さきに江戸初期まで演じていたとしたのは  
寛永十六年（一六三九）の大蔵虎清筆『間・  
風流伝書』にアイの装束などが出ていること  
や元和二年（一六一六）の下川丹波守重次筆  
の笛伝書『梅花集（律）』に舞事が出ているこ  
とによつたが、後者には、「御服頂戴之時」と  
して「鶴羽 佐保山 七夕 西玉母 岩船  
呉服 金札 已上七番也」とある。「七夕」は  
祝言能としても演じられていたわけである。

（にしのはるお・法政大学助教授）